



岡部 均さん 近影

昭和45年卒業の岡部 均さんの名は、前から知っていました。以前に「43年目に、初めて開いた同期会」というタイトルで、この同期会を実現させた野村啓子さんとの対談を載せたことがあります。その時に、野村さんと協力してこの同期会を実現させた人として、岡部さんの名を覚えていました。

今年の友松会「新春のつどい」の時に、野村さんから一枚の印刷物をわたされました。なにかと思ったら、岡部さんが昔勤務した学校について書いたものでした。読んでみるとなかなかおもしろいので、一度会って話を聞いて見たいと思いました。しかし対談やら支部訪問やらの予定がいろいろあってなかなか実現出来ず、9カ月も経った10月28日にやっと実現しました。以下がその記録です。

挫折をこえて突き進む

楽しき我が人生

語り手 岡部 均 (昭和45年-1970 卒)

聞き手 黒川 鈴谷 (昭和35年-1960 卒)



黒川 聞くところによると、岡部さんは現在でも合唱やゴルフ、野球など多方面に御活躍されているようで大変お忙しいようですが、今日はご多忙な予定の合間にお出で頂きましてありがとうございます。現在の状況だけでなく、昭和45年の御卒業ということで、あまり触れたくない話題でしょうが、国大紛争のことについてもお話頂ければと思います。宜しくお願いいたします。

岡部 こちらこそ宜しくお願いします。

黒川 岡部さんのことは、「43年目に、初めて開いた同期会」の対談のときに、野村啓子さんから聞いて知っていました。でもお会いしたのは今日が初めてですね。

岡部 そうですね。初めてだと思います。

黒川 岡部さんが法政二高野球部のことを書かれた文章を読んで、とてもおもしろかったのですが、法政二高のご出身なのですか。

岡部 いや私は厚木高校出身です。

黒川 ああ、厚木高校ですか。私の同級生にも厚木高校を出た人がいます。先日対談の記録をお送りした川崎の小川信夫さんも旧制厚木中学出身ですから、岡部さんの大先輩ですね。ところで私達は卒業すると公立学校に勤務するのが普通ですが、法政二高に奉職されたのは何か理由があるのですか。

岡部 私達は国大紛争の影響で3月に卒業出来ず6月に卒業しました。紛争が収まってから教育実習に行ったのですが、その時に実習校の校長先生に「岡部君、君は教員になるつもりなのかね」と聞かれました。「はい」と答えると校長先生が、「残念ながら、君のことは推薦

できない。分かるでしょう。」と言われました。私は本当は分からなかったのですが、「分かります」と答えました。そう答えたのは自分なりに覚えがあったからです。

黒川 その覚えというのはどんなことですか。

岡部 たぶん私が国大紛争に関わりが有ったからだろうと思ったのです。

黒川 すると岡部さんは全共闘のメンバーだったのですか。

岡部 いや私は全共闘とは関係ありません。昭和44年(1969)1月18日の教育学部学生大会で、自治会が提案した無期限ストが可決され、1月25日にストに突入しました。私は教育学部の自治会の一員でしたから、その意味で紛争に関わりが有ったのです。全共闘(全学共闘会議)は1月17日に結成されたのですが、スト突入とともに、学生自治会とは次第に距離を置くようになりました。ですから私は自然と全共闘から離れて行きました。

黒川 紛争末期に、何とか事態を収拾しようとする組織が出来たでしょう。

岡部 統一代表団ですね。私はそれにも入っていません。私が役員をやっていたのは、ストに入る前の自治会です。

黒川 自治会の役員をやっていたという理由で公立学校に就職できず、私立に行った人が私の同期生にもいましたよ。

岡部 そんな訳で、どこか採ってくれるところがないかなと思っていたら、法政女子高を紹介してくれる人があって、採用試験を受けたのです。



封鎖された清水が丘キャンパス

黒川 それは良かったですね。それで採用されたのですか。

岡部 いや、落ちてしまいました。

黒川 えっ、それは残念でしたね。どうして落とされたのですか。また自治会のことですか。

岡部 いやそうではなくて原因は私に在るのです。一年後に同じ法政の二高に就職したので、その時に私の採用試験の試験官だった人に聞いたのですが、面接の採点結果がきわめて悪かったとのことでした。

黒川 どんなことが悪かったのですか。態度が悪かったのですか。

岡部 いや態度ではなくて、採用試験と言うものに対する私の勉強不足でしたね。面接の時にこういうことを聞かれたのです。「貴方は女子高の採用試験を受けに来たのだが、女子教育についてどんな考えをお持ちですか。」と。

黒川 何と答えたのですか。

岡部 たぶん正解は、「日本は民主社会になったけれども、女性の地位はまだ低い。だから女性の地位を高めるために微力ながら女子教育のために努力したい。」とでも答えれば良かったのでしょう。

黒川 公式的な答えだけれど、その辺がまあ正解でしょうね。

岡部 ところが私は「採用されるのならば何処でも良かったのだが、たまたまこちらの学校で教員の募集があったので応募しました。」と答えました。法政二高へ就職した後で試験官だった人に、「岡部さん、あれはないよ。あんな答えをしたら、どんな面接官でも落としますよ。」と言われました。

黒川 何となく分かる気もしますよ。若い時って口先だけで誤魔化して喋るのは出来ないし、やろうとも思いませんね。まあ、出来る人もいるけれど。

岡 部 自分がそういうことが出来なかったからと言って、自慢したり威張ったりする気はありませんが。とにかくまた不採用になったので奮起して鶴見女子大に通い、図書館司書の資格を取ることにしました。今度はいよいよ夏休みの二カ月間で図書教諭と司書と両方の資格が貰えたので、国大の図書館に臨時雇いで入って半年ほど勤務しました。

黒 川 司書の資格って、そんなに短期間に取れるのですか。

岡 部 教員資格のある人は基礎的に必要な単位は取得しているので、いわゆる図書館学だけ学べば良いのです。具体的には、「図書館の歴史」とか「図書館の役割」、「図書館員としての心得」などで、一番難しいのは図書に「図書番号」を付けることが出来るかどうかです。

黒 川 そうですか。でも岡部さんの元来の専門は物理でしょう。図書館学とは少し遠い気もします。私のように国語国文学専攻なら、図書と親和性が感じられますが。

岡 部 そうですね。物理から図書に何故行ったかは思い出せませんが、就職のために資格が欲しかったのは確かです。国大に入るときに物理を志望したのは、理科の教員になるということより研究者になりたかったからです。国大は教育系だけれど、良い先生がいっぱいいるということを聞いていましたので。だから研究に必要なだということ、文献に対する親しみがあつたのかもしれない。

そんな訳で国大の図書館で臨時雇いになったのですが、ちゃんとした図書館員になるためには「国家公務員乙」という試験を受けねばなりません。そこで、その試験を受けました。ところが私はどうも試験に弱くて、この試験にも見事に失敗しました。

黒 川 教育実習のときから数えると、三度目の挫折ですね。今度はなにが原因だったのですか。

岡 部 試験を受けて分かったのですが、出題が英文で出て解答も英文で書くという設問が有ったのです。これが解答は分かるのですが、その解答を英文で書くのが出来ない。結局試験に落ちてしまいました。

黒 川 なるほど図書館では外国の文献も扱いますからね。私も退職後に大仏記念館というところに勤めた時に、フランス語の文献の整理をさせられて大変だったことがあります。しかし試験の傾向はたいいてい参考書には出ていますが、そういうものは見なかったのですか。

岡 部 見なかったのですね。私が試験に弱いというのもそういう準備をしないからです。



現在の国大図書館(文中の図書館ではありません)

黒 川 これまでのところ進もうとする方向がみな閉ざされている感じで大変ですが、民間の企業に勤めようとは思わなかったのですか。特に理系の学科の人では始めから民間を目指す人もいるようですが。

岡 部 私も民間会社の試験は受けました。先輩が伊藤忠に勤めていて、「岡部さん、受けるなら受けなさいよ。」と言ってくれたので受けたのです。伊藤忠は商事会社ですが、コンピュータ一部門の研究所へ行く予定でした。でも先輩に後で結果を聞いたら、あれでは受からないよと言われました。

黒 川 受からなかったのは、やはり自治会に関わったことと関係があるのですか。

岡 部 いや、民間の場合はそういうことは全く関係ありません。公務員でないので気に入らなければ止めさせることが出来ますからね。ではどうして駄目だったかというと、私は試験で

質問されていることは分かるのですが、答えが記述式だから上手く書けないのです。例えば「光電効果につき説明せよ」という問題が出た時、最小限の言葉で必要なことを全部述べなければならぬ。それがうまく書けない。だから私は試験に弱いのです。

黒川 そうすると文章表現力、つまり国語的能力ですね。

岡部 そうも言えますね。そんなことで民間の試験にも落ちてどうしようかと思っていたら、男子校の法政二高を受けないかと言う話がきました。そこで今度は少し予習をして、無事に受かりました。それで国大卒業後1年近くたった翌年の4月から法政二高に勤務しました。



川崎市中原区にある法政二高

黒川 いやあ、良かったですね。で、法政二高の様子はどうだったのですか。

岡部 とても良い学校に勤めたなと思いました。毎朝のホームルームは別に教室に行かなくてもよく、学級のいろいろな問題はロングホームルームでやれば良いというのです。ところが私は三年の担任になったので、生徒と年齢はたいして違いません。学級委員の生徒がとても優秀な子で、ホームルームも「先生、僕らでやりますから休んでいて下さい」と言うのです。高三ともなると進学とか人生相談とか大変だろうと思ったのですが、大変なことは少しもありませんでした。

黒川 法政二高は附属だから、ほとんどの子は法政大学に行くのでしょうか。

岡部 そうです。だから悩みなどはそんなにない。自分は良い学校に来たなと思いました。

黒川 岡部さんは専門が物理だから、物理の授業もやったのでしょうか。

岡部 もちろんやりました。でも物理が好きな生徒はまずいません。何故なら法政大学には工学部がありますがそれ以外は文系の学部で、二高の生徒の8割から9割は文系の学部に進学します。だから私が授業中にあやふやなことを喋っても生徒に見破られない。鋭いことを聞く子が稀にいて、「うーん、それはもう一度調べなおしてくる、宿題にしよう。」と言うとそれで終わってしまうのです。

黒川 私も小学生にその方法をよく使いましたよ。「うーん、良い質問だ。明日までに調べて来る。」と言ってね。

岡部 でも担当の物理の授業をいい加減にやっていたわけではありません。教材研究は自由に出来たし、授業計画も思うようにやらせてもらえました。今でも私の考案した実験が2つほど受け継がれていて、それは私のちょっとした誇りです。

黒川 ところで、法政二高と言えば何と言っても野球なので、そちらの話題に行きましょうか。法政二高では硬式野球部の顧問をされたそうですが。

岡部 私は厚木高校で野球部にいましたから、野球が好きなのです。法政二高では部活動の顧問は希望制なので、毎年「第一希望硬式野球部」「第二希望軟式野球部」と希望を出していました。でも以前から顧問をやっている人がいるので、なかなか希望は通りませんでした。毎年ずっと希望を出し続けて、十年目にやっと前任者が顧問を辞めて希望が通ったのです。校内の人事委員会が私に、「硬式野球部の顧問を希望しているが、本当に出来るのか。」と訊ねて来ました。そこで私は、「高校時代に野球部だったからもちろん出来る。」と答えた

のです。そこで「では貴方をお願いしよう。」と言うことになりました。

黒川 良かったですね。ところで監督や部長というのは夏の甲子園大会でも良くテレビに出てくるので分かりますが、顧問というのはどんなことをするのですか。

岡部 監督と言うのはその学校の教員でなくても、部外者でもなれます。でも顧問はその学校の教員で、更に顧問が複数いる場合その中の一人が部長になります。

黒川 テレビで見ると部長さんはベンチに入っていますね。

岡部 ルールから言うと、部長はベンチに入らなければいけないのです。部長が選手の統括責任者で、極端な話では監督が居なくても試合は出来ます。部長が選手の一人をその試合の監督に決めれば良いのですから。でも部長が居ないと試合は出来ません。

黒川 横浜の渡辺監督とか古くは池田の蔦監督とか、監督さんの名前は知っているが部長さんの名前は知りませんね。だから部長さんがそんなに大切なものとは知りませんでした。顧問になって何年目に部長になったのですか。

岡部 顧問は二人いたのですが、もう一人の方が「岡部君に任せるよ。」と言うので、高野連に報告して私がすぐ部長になりました。そして部長になって三年目に甲子園出場を果たしたのです。

黒川 法政二高が話題になったのは、後に巨人で活躍した柴田の時代ですね。あの時の柴田と浪商の尾崎との投げ合いは凄かったです。私が国大を卒業したばかりの頃でした。

岡部 その以前から甲子園には時どき出場していたのですが、昭和 35 年(1960) に夏の大会で全国優勝し、その翌年の選抜大会でも優勝して話題になりました。その年の夏の大会では浪商に負けて、夏・春・夏の三連覇は出来ませんでした。

黒川 岡部さんが甲子園に出たのは、柴田の時代から何年後ですか。

岡部 私達が甲子園に出場したのは昭和 57 年(1982) ですから、柴田の時代から数えると 21 年目ですね。本当はこの前年に好投手がいて、甲子園出場のチャンスだったのです。ところが春と夏の大会の間に開催された高校生の日米交歓試合で、うちのエースが肩を痛めてしまい、それは夏までに治ったのですが今度は監督が病気で入院してしまいました。監督が倒れてしまったので、二高の先輩で法政大学の監督を辞めたばかりの五明さんに臨時に監督をお願いしました。でもその甲斐も無く、その年は出場出来ませんでした。

黒川 五明さんというのは、柴田の時代に外野手として甲子園に出場した人ですね。野村さんから見せて貰った岡部さんの「21 年ぶりの甲子園の思い出」という文章のなかに五明さんの



スタンドで声援する法政二高応援団



夏の全国高校野球神奈川大会優勝 (1982 年)



夏の甲子園大会、堂々の入場行進 (1982 年)

ノックの話が出ていますね。おもしろいのでちょっと引用させていただきます。

「(前略) 五明さんのノックの打球はとても速く、どの選手も追いつけません。五明さんのノックを見て、私が『あの選手はあと一歩が足りませんね。』という、『そうではない、私があと一歩の所に打っているのです。あの選手は確実に上達していますよ。あれが取れるようになったら、もう一歩遠くに打ちます。』なるほど、選手を伸ばす指導とはこういう事かと舌を巻きました。(後略) 」

岡 部 この年はいろいろなことがあったので甲子園には出場できなかったのですが、その次の年に甲子園に行けたのは、病が癒えて指揮を執った大石光麿監督さんの功績ですが、前年の五明さんの指導の遺産もあったと思います。

黒 川 甲子園ではどんな成績だったのですか。

岡 部 二つ勝って三回戦で東洋大姫路に負けました。二勝一敗です。

黒 川 でも甲子園大会のベンチにはいるなんて、なかなか経験できることではありませんね。これも就職の時に試験にいろいろ失敗して法政二高の先生になったからで、何が幸せになるかわかりませんね。

岡 部 私もそう思っています。開会式とオープニングゲームをベンチの中から見ていた時の、甲子園を揺るがすゴーというあの歓声は今も忘れられません。

この大石監督という人は横浜の渡辺監督、Y校の古屋監督と並んで当時の県下高校球界のビッグ3と称された方です。選手の一人ひとりの個性を見抜く目は抜群でした。ある時、選手のO君がフリーバッティングで良い当たりができません。私が「彼はいまスランプなのですかね。」と言ったところ、監督は「いや、あれは彼が自分の苦手なコースに投げてもらっているのだよ。彼は伸びるよ。」と言いました。O君はその後チームの中心になり、クリーンアップを打ちました。大石監督の下で、二高はその後2回甲子園に出場しました。

黒 川 野球の話はこのくらいにして、現在なさっているいろいろな活動についてお聞きしたいのですが、その前にそれとは別にぜひお聞きしたいことが一つあります。それは国大紛争に絡むことで、私がかねがね疑問に思っていることがあるので、それをぜひ伺いたい。

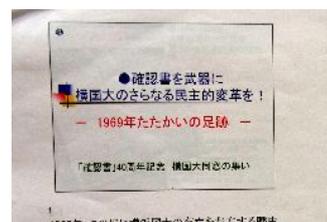
『横浜国立大学教育学部のあゆみ』という浩瀚な本がありますが、その中の国大紛争に触れた箇所を読んでも良く分からない。今日、資料を持っていくとのことでしたが、その資料はどれですか。

岡 部 この四点です。一つは「横国大民主化闘争の総括と展望」と題する文書で、国大学生自治会全学中央委員会と各学部自治会の名で、闘争終了後の1970年4月13日に出されたものです。もう一つは各学部の教授会と学生大会で批准・承認を受けて発効した「最終確認書」です。後一つは、確認書40周年記念として開催した「横国大同窓の集い」の際に参加者に当時の資料をスライドで見せたのですが、それを印刷したものです。最後の一つは「横浜国立大学統合闘争小史」です。

黒 川 いずれも貴重な資料であることは分かりますが、これを読みこんで疑問点を整理し、質問をするというのは、短時間では無理です。そこでこの紛争について私が感じて



「総括と展望」1970.4.13 発行



「確認書」40周年記念資料スライド

いる素朴な疑問をお尋ねしてよいでしょうか。

岡 部 結構です、どうぞ。

黒 川 この対談の最初の方で出た話では、岡部さんもその一員だった教育学部学生自治会が提案して無期限ストに突入したということでしたね。

岡 部 その通りです。

黒 川 そうすると全学共闘会議（全共闘）は、紛争が始まってから出来たのですか。

岡 部 そのようですね。全共闘が出来たことも国大紛争が長引いた原因の一つです。ストライキに入る時は自治会の決議で決めたが、ストに入った後では全共闘を作っているから、学生自治会の決定には拘束されない、ある自治会がスト解除を決めてもそんなの関係ないと全共闘は言うのです。

黒 川 なるほど、平成 24 年 3 月に出した「磯子支部だより 7 号」と 5 月に出した「磯子支部だより 8 号」でこの時代のことを扱っているのですが、紛争が長引くので一般の学生にも何とかしなければという空気が広がったようですね。

岡 部 昭和 44 年(1969) の 6 月の初めに、紛争解決の方途を探る教育学部のクラス連絡協議会(クラ協)や他学部の同様な組織が集まり、話し合いが持たれました。その話し合いを元にして全学統一代表団が結成され、大学当局と話し合いを始めたのです。

黒 川 するとその頃には、全共闘は無くなっていたのですか。

岡 部 いや、まだあります。

黒 川 でも大学当局と話し合ったのは、全学統一代表団ですね。全共闘は何をしていたのですか。

岡 部 何もしていません。彼ら全共闘は「話したってしょうがない。」と言う考えだから、話し合いを求めているのです。自分達が大学の占拠を続けて、その結果として大学が潰れてもいいじゃないか、駄目なら警官隊でも何でも入れれば良いだろうというのが、彼らの考えなのです。

黒 川 まるで、東大の安田講堂攻防戦ですね。

岡 部 そう、彼等は安田講堂事件と全く同じことを考えていたのでしょう。警官隊が来て排除されると、「俺たちは正義の闘争をやっているのに、排除されてしまった。」というポーズを取りたかったのだと私は思います。

黒 川 なるほど、全共闘が最後まで大学当局と話し合いによる交渉をしなかったのは、そういう理由かも知れませんね。紛争解決に向けて、全共闘が何の努力もしなかった理由は分かりました。

ただ紛争に関して私が良く分からないことがもう一つあるので、それについてお尋ねしたいと思います。それは何かと言うと、紛争の途中で「民青」の人達が排除されたでしょう。それは何故なのか。

岡 部 何故なのかは、良くわかりません。推測ですが、大学の「占拠」や「封鎖」に邪魔な存在



1966年頃 フライヤージム(横浜公園体育館)
全学団交の会場となったフライヤージム



封鎖解除された清水が丘キャンパス
(昭和 44.10.29)

だったのでしょうか。同時期に教職員も排除されましたから。

黒川 誰が排除したのですか。

岡部 それは全共闘です。

黒川 でも、全共闘が排除しようとしても、一般の学生が賛成しなければ排除できないでしょう。

岡部 しかし全共闘はヘルメットを被って武装している。一般の学生から見れば怖い存在なので全共闘のやることに反対できなかったのです。

黒川 その当時は全共闘の暴力が恐ろしくて、と言うことも有ったでしょう。だが紛争が解決してから何十年も経って「磯子支部だより 7号・8号」で話を聞いた人達（もちろん当時は全共闘ではなく普通の一般の学生でした）、その人達がいまだに「民青」には良い感情を持っていないように感じられます。それは何故なのでしょう。

岡部 学生運動を政党が支配するのは厭だという感情は、一般学生の間にあったと思います。特に 60 年安保闘争の後では、そういう空気がありました。だから全共闘が、あれだけヘルメットや棍棒で武装して暴力的でも、政党とは関わりがないからそんなに酷いことはしないだろうという気持ち、一般学生の間にあったでしょう。



ハンガリー動乱 (1960 年) 立ちあがった市民



プラハの春 (1968 年) ソ連軍戦車の前に立つ青年

黒川 暴力的なことについては、全共闘がやりすぎだと一般の学生も思っていたことでしょう。

しかし主張を聞くと全共闘のほうがスジが通っている。「民青」の言う事にはごまかしがあり、本当にやりたいことを隠して、「自分達は一般学生の味方です。」と言っているのではないか、と言う「民青」に対する不信感があつたのではと思います。当時人気があつた「ベ平連」の活動についても民青系の方は、「あんなのはパフォーマンスだから、惑わされてはいけないよ。」と言っていたそうですが、それについても一般の学生は、「一生懸命にやっているのに、そんなこと言うことはないのでは」という心情だつたと聞いています。ですから、紛争のある時期に民青系の方が排除されたと言うのは、民青の背後にいる政党に対する不信感があつたからではありませんか。

岡部 そういう見方もあるでしょうね。

黒川 そういう不信感は、若者が本来持っている正義感や純粋な理想主義が、例えば「ハンガリー動乱」

や「プラハの春」などの事件などによって傷つけられ屈折していったことに原因がある、と思います。「天安門事件」などはずっと後ですけど。

岡部 しかし、そういう事件の後では日本の政党は、その事件に対する大国の態度を批判する声明をちゃんと出していますよ。

黒川 まあ、こういう問題は立場の違いによって解釈も違うので、これ以上深入りするのは止めましょう。この後は少し話題を変えて、岡部さんが今やっている多彩な活動についてお尋ねしたいのですが、法政二高はやはり定年で退職されたのでしょうか。

岡 部 いや、法政二高の定年は**65歳**なのですが、私は**57歳**で退職しました。

黒 川 えっ、それはいったい何故なのですか。

岡 部 一つは健康上の問題があります。自分としては退職したら第二の人生を歩もうと思っていたのですが、結果としては**59歳**までの二年間はほとんど病院通いでした。

黒 川 身体の何処が悪かったのですか。

岡 部 一番悪かったのは無呼吸症候群です。一晩で**70回**ぐらい呼吸停止があったのです。それと痛風の発症があり、**3年**くらい薬を飲んでいました。さらに糖尿病とか内臓ポリープとかいろいろな所が悪かったのです。これらを良くするには**60歳**くらいまでかかりました。定年より早く退職したもう一つの理由としては、パソコンがあります。職場にパソコンが普及し始め、私も少しやったのですが若い連中にはやはりかなわない。そのうち打ち合わせ事項も「パソコンで送るから、朝授業に行く前に必ず見て。」と言うようになってきました。もう俺たちの時代じゃない。そんなパソコンに支配されるような生活はしたくないと思ったのです。それで退職することにしました。

黒 川 パソコンについてのその気持ちはよく分かりますよ。今では誰でもホームページを作れるのが当たり前という時代ですからね。それで健康が回復してから、今のような活動をはじめた訳ですね。

岡 部 野球のクラブを作って、ゴルフのクラブを作って、スポーツが二つ出来たから文化系もやろうと思って、地域の合唱団に入ったのです。

黒 川 合唱は大学時代からやっていたのですか。

岡 部 いや、大学時代は写真部なので、合唱はやっていません。ただ小さい頃から歌がうまいと

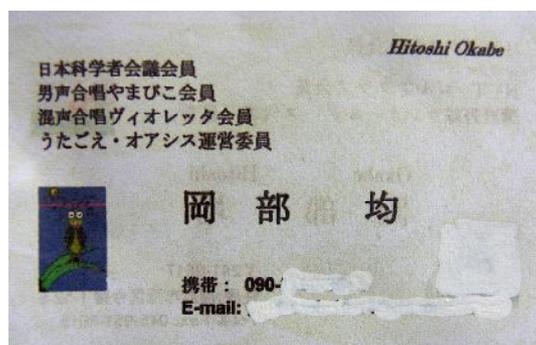
言われていました。小学校1年の学芸会では、私ともう一人の女の子と二人が選ばれて歌ったこともありますし、3年生の時にコーラスの好きな先生が合唱団を作ったのですが、「岡部、お前も来い。」と私もそこに入れられました。でも高校・大学時代にちゃんとしたコーラスをやった訳ではないので、きちんとした技術的な訓練は受けていません。

黒 川 名詞を拝見すると、合唱は一つでなく幾つも入っていますね。

岡 部 混声合唱団では男子が少ないのです。女の人が**30人**いるとすると男は**5人**くらいですね。だから私が合唱をやっていると聞くと、「岡部さん、やってよ。」と他の合唱団に誘われていま三つの合唱団に入っています。

黒 川 運動関係でやっているのは、野球とゴルフですね。

岡 部 野球のクラブは「サンオールダース」という名ですが、私が創設者で監督です。還暦野球リーグというのが神奈川県にもあるので、そこに加入したかったのです。ところが**60歳**のときにチームを作ってそのリーグに加入しようとしたらリーグの理事の人に、「岡部さん、



多彩な活動を反映する 岡部さんの名刺

チームを作ったからすぐ入れるというものじゃないのですよ。」と言われました。つまりどの程度のチームか試合をして実績を作ってから申請しなさいと言う事なのです。

その後、いろいろなチームと試合してリーグに加入を認められるまでに三年かかりました。

黒川 なかなか大変ですね。それで加入するとリーグ戦をやるのですか。

岡部 そうです。リーグ戦は春の大会・秋の大会とあるのですが、わがチームはこれまで勝ったことがありません。六年間で0勝36敗です。

黒川 なんと批評してよいか言葉に苦しむ成績ですね。ではゴルフの話を伺いましょうか。

岡部 ゴルフの方も、私がクラブの創設者で会長です。クラブの人数は80人くらいで、月に一回ツアーを組んでどこかのゴルフ場に行き皆でゴルフをするのです。

黒川 いろいろな活動をなさっていると、けっこう忙しいでしょう。

岡部 けっこう忙しいです。野球は練習が週1回、試合のある週はもう1回。ゴルフは月1回のツアーと有志だけで練習しながらのダベリングが週1回です。合唱は週1回ですが、三つ入っているので平均すると週2回くらいです。

黒川 そのくらい元気だったら、まだまだお勤めが出来ますね。退職後に何処かで勤務されたことは無かったですか。

岡部 二高を退職する時に、法政大学工学部の講師をしませんかという話があったのです。毎日ではきついが、週に一日くらいならやりますと言って、五年くらいやりました。

黒川 そこで頑張らって一生懸命やったら、いまごろ法政大学名誉教授かもね。

岡部 いや、私は一生懸命に身を入れて何かをやるのが苦手なのです。人に教えるのは好きですが、高い評価を得るために努力するというのがどうも苦手で出来ません。

黒川 だいぶ長い時間いろいろなお話を伺ってきたので、そろそろ終わりにしたいと思いますが、最後に同期会のことをお聞きします。

一昨年の11月に同期の野村啓子さんと協力して「43年目の同期会」を実現されたのですが、今後この同期会を何度か開催しようというお考えはありますか。

岡部 はい、あります。あの同期会が開催される何年前に、「確認書40周年記念 横国大同窓の集い」という会合を持ちました。これは当時一緒に戦った同志的結合の人達の会でした。でも私はそれだけでなく、当時は反対の意見を持って対立した人達とも、この長い年月の後で当時のわだかまりを水に流して、仲良く手を取り合って再会したいと思いました。私のこの考えに野村さんも賛成してくれて、あの集会が実現したのです。だからその精神を続けるために、同期会は今後も何回か開催したいと思っています。

黒川 それを聞いて安心し、良かったなあと思います。長い時間お話を伺い本当にありがとうございました。今日の対談はこれで終わります。



あとがき (H27.11.19)

岡部さんと私は、国大の卒業期で10期違います。年齢はもう少し違うかもしれませんが。年齢が10年以上違い、職場も違えば普通は知り合うことも無いのですが、そこは同窓生の不思議さで、岡部さんのことは、岡部さんと同期の野村啓子さんを通して何となく知っていました。野村さんから聞いた話では、かなりいろいろ苦勞した人らしいのですが、そのことが岡部さんの生来持っている(らしい) 楽天的な所を少しも損なっていないようなのに興味を覚え、一度話を聞きたいと思いました。会ってみると、予想通りの楽しい人でした。それがこの対談です。